

郷土資料館の

お宝探訪

Treasure 3 海揚がりの「イイダコツボ」



郷土資料館の大事な仕事のひとつに、播磨町の歴史を彩る様々な資料の収集や保管があります。本年度は、数ある資料館の収蔵品のうち、代表的なものを紹介していきます。広報はりまの掲載月にあわせ、関係資料を展示します。ぜひ本物を見に来てください。

播磨町郷土資料館 ☎079(435)5000

今月号で紹介するのは、播磨町沖周辺に広がる「鹿の瀬」で採集された地元の名物であるタコをとる漁具（タコツボ）の話です。

タコツボはタコの習性を巧みに利用した魚法で、2千数百年前の弥生時代の中ごろに新しく考えだされた漁法です。紹介するタコツボは、その大きさからみてイイダコを獲得するためのタコツボとされていて、大中遺跡など弥生時代の遺跡から、たくさん出土しています。

大中遺跡では昭和37、47年の発掘調査で、150個以上ものイイダコツボが出土しています。また、県立考古博物館建設に先立って平成15年度に調査された「堅穴建物」からは、漁期が終わると、村まで持ち帰り大事に保管していたのでしょつか、20個以上のイイダコツボが出土しています（考古博物館の「発掘ひろば」で展示されています）。

さて、播磨灘や大阪湾に面した

弥生時代の遺跡から出土するイイダコツボは、コップ形をした高さ10センチメートルほどの小型のもの（写真左）で、口の近くに小さな穴を開け、紐を通してツボを次々にくり付け、海に沈めます。形を少し詳しく見ると、底が丸く作られているものと、平たく作られているものの2種があり、底に穴が開いているものもあります。作業がしやすいように、さまざまな工夫を凝らしたのでしょう。

ところで、弥生時代の遺跡からは、大型のタコツボはほとんど見つかっていません。マダコなど大きなタコは別の獲り方をしていたようです。

資料館では大中遺跡出土のイイダコツボのほかに、播磨町古宮沖の海底から採集された「海揚がり」のイイダコツボを保管しています。

底引き網に引っかかって、大中遺跡のものと同じようなコップ形のものほか、釣鐘のような形をしたイイダコツボ（写真右）も採集されています。遺跡からの出土品と違って、フジツボなどが付着していて、長い間海底に沈んでいたことがわかります。現在、播磨町ではタコツボを使った漁は行われていませんが、かつてはイイダコツボが使われていたようです。

この釣鐘型のタコツボは、弥生時代に登場したコップ形のものに数百年遅れて、古墳時代になってから登場するようです。よりタコの習性をつまぐ利用していて、タコがツボの中につまぐ入り、豊漁のタコが食卓を賑わせたことでしょう。

播磨町郷土資料館 館長 井守徳男

町の人口 5月1日現在 (住民基本台帳人口+外国籍人口)
34,697人(+39人) 男…17,024人(+32人) 女…17,673人(+7人) 世帯数…14,055戸(+49戸)

